

まちづくり・
コミュニティ

町会・自治会

防犯・防災・
みまもり

子ども

教育

シニアライフ

健康

スポーツ

芸術・文化・
趣味

環境

ふくしと
サポートNPO・
ボランティア

国際交流

男女共同参画

農業・商工業

ホーム > 市民レポーター > 「東久留米歴史散歩（一） 前沢御殿跡（八幡町二丁目11）」



東久留米は、かつては武蔵の国に属していましたが、今でも当時の歴史を感じさせる場所が残されています。

きょうは、その一つ前沢御殿跡を訪ねてみました。

前沢御殿は、鷹狩りが行われた時に殿さまが宿泊するために作られた館ですが、今は、昔に御殿があったと書きしるされた碑があるだけです。マンションや家が建ち並んでおり、ここから畑や田んぼが見えたとは想像すらできない景色です。前沢御殿は寛永十八年（1641）に建てられましたが、これと同じ御殿は中清戸（清瀬市）、野老沢（ところさわ、所沢市）にもありました。

（写真：現在の前沢御殿跡辺り風景）



鷹狩りは平安時代の後期に始まり、戦国時代、江戸時代によく行われました。領主の領地の検分や武士の心身の鍛練も兼ねたとされていますが、最大の目的は殿さまのフラストレーションの解消にありました。

しかしながら、鷹狩りが行われることが決まると、その準備は大変なもので、参加の人数は数百名を超える大掛かりなものでした。

江戸から武蔵の田や畑、丘陵地で行われましたが、一旦、鷹狩りがきまると、鷹狩りがすべてに優先されました。一番の犠牲になったのは、百姓でした。

鷹狩りが決まると、

田は水を張ったままにしない

案山子は許可なく立てない

殿の御成りや逗留の時は犬、猫をつないでおくことなどいろいろな通達がだされ、米や野菜の栽培よりも規則が優先されることもありました。もちろん、道

や橋の手入れに百姓がかりだされました。

（写真：前沢御殿跡の碑）

鷹狩りは、オオタカ、ハヤブサなどの鷹が鴨（かも）、雉（きじ）などの鳥をとらえるものでしたが、当時は鶴の肉が最高の獲物とされました。今では考えられませんが、鶴が東久留米にも飛来していました。また、猪やウサギも獲物になりました。

調理にはお城から専門の料理人がきて調理していましたが、残ったものは塩づめにして保存され贈答に使われました。鴨の肉を鉄板の上で焼き、生醤油と大根おろしで食べるのが淡泊な味ではあったが、最高の珍味とされました。鷹は野生の鷹を捕えて鷹匠の手で育てられました。人工的に孵化された鷹もありましたが、人間に慣れて鷹狩りにはあまり向かないものが多かった。獲物の小鳥は普段から飼育され、小鳥は鷹狩りの時にはいっせいに放たれて、鷹狩りはさしずめ空に展開されたショーの雰囲気のあるイベントでした。

前沢御殿のあった場所は、戦国時代は北条氏（北条氏康、氏政）江戸時代になると尾張藩の鷹場としてその役目をはたしていました。今から四百年から五百年位前のことですが、暇な時に前沢御殿跡に立って昔をしのぶのもいかもしれません。

市民記者養成講座参加者「浅羽芳久（南町 在住）」

参考図書

「東久留米の江戸時代」（東久留米市教育委員会）

「尾州藩の鷹場について」（槇本晶子）（多摩のあゆみ）